

寄稿

広場の人形劇

人形劇団ボンコレラ 工藤 夏海

2019年3月から5年間、アートを通して誰もが豊かに生きることのできる社会の実現を目指して活動するNPO法人エイブル・アート・ジャパン（以下エイブルアート）の事業の1つとして、人形劇ワークショップ「みんなでつくるよ広場の人形劇！」を実施しました。私は人形劇をやっているアーティストとしてファンリテーターの依頼を受け、プログラムの作成や進行、創作のフォローなどを担いました。エイブルアートには2018年から始まったアトリエ事業もあり、アトリエからも人形劇に興味を持った方が参加してくれました。

私自身初めての人形劇ワークショップで、障がいのある人ない人が共に作る場というのも初めて。知らないことだらけでしたが、専門的な知識を持ったケアの方やエイブルアートのスタッフの皆さん、参加者の皆さんと共に手探りで歩んだ、学びの多い5年間でした。

最初に組んだプログラムは、人形劇の座学や動かし方ABCといった、人形劇を知って欲しい！といった内容でした。しかし、集まった参加者は幼児から大人まで、障がいの種別もさまざま、識字、発語、手作業の範囲も人によって異なり、このプログラムではうまくいかないとすぐにわかりました。

人形劇の楽しさを体験でき、かつ、集まった一人ひとりの特性が生きる内容にするにはどうしたら良いか。まずは一人ひとりを知ることから始めました。一人で全員を見る事は不可能なので、スタッフで分担し、終了後の振り返りで「〇〇さんは最初緊張していたけど人形を見たらほぐれた」とか「〇〇ちゃんは他のことをして遊んでたけど、工作の時間は集中していた」など共有しました。アトリエには最後に講評会があって、ゆっくりじっくりみんなでその人の作品に触れる時間がとても良かったので、人形劇ワークショップでも誰かの表現をみんなで囲んで見る、ということ意識的にやりました。人形劇は演者と観客がいて初めて完成するので、自然とその構図を作れます。さらに人形劇特有の、演者、楽団、人形や舞台の造形、シナリオライターなどなど、構成要素が多いことも功を奏しました。シャイで人前に出たく無いけど造形が得意なMさんには舞台美術を担ってもらったり、発語や手作業に制約があるけれど楽器に強い興味を示すHさんには、楽団長として音を鳴らしてもらいました。お話がどんどん出てくるスター気質のMちゃんは疲れやすいので休憩場所

を作り、したいことが明確な演出家のAちゃんは声や視線や手、体で伝えてくるのでそれを見逃さないことも重要でした。また、保護者も〇〇ちゃんのママ、パパ、ではなく参加者として名前呼び、特性を活かし一緒に人形劇作りを楽しみました。

単発の参加がOKということもあり、回ごとに完結する内容で、大きい人形作ってパレード！とか、テーブルの上劇場など、プログラムの大枠だけ決めておいて、ほとんどの場合は、机や椅子、布、段ボール、小さな楽器など身近な物を使いながらハードルを低くした遊びの延長のようなプログラムで、即興的に生まれる出来事を取り込みながら創作していきました。連続参加が難しかったり、何より私が即興好きなこともあって練習を重ねて発表する方法は選びませんでした。その後札幌のパペットアートヴィレッジの取り組みを拝見し、そういった経験をこちらの判断で遠ざけてはいけないな～と思いました。実際、1度だけやった上演会（コロナで無観客ではあったけれど）では、本格的な舞台照明や音響などにみんな大喜びでしたし、リハーサルや本番など、いつもと違う緊張感のある創作を参加者もスタッフも楽しみました。

運営がうまくいかなかった回の振り返り会で「ケアしているつもりでいたけど、わたしたちがケアされていた」という言葉がスタッフから出て、皆で大きく頷いたことがあります。私たちは提供者と享受者という一方的な関係ではなく、互いに影響を受けている。例えばその場に気持ちや体が合わせられない時、それを隠さずに表明する姿を見ると、自分は過剰なまでにそう言う気持ちを制御していると気づかされます。表明する姿を見ていると気持ちが楽になるのです。そしてこの方法ではダメか、じゃあ何か別の方法はないかと工夫し始める。その工夫は、いずれみんなの為になっていくのだと思います。

工藤 夏海(くどう なつみ)

宮城県出身仙台市在住。1997年に友人からの誘いで人形劇団ボンコレラを結成。音楽グループyumboでは音楽器を担当。現在は市内で「喫茶ホルン」を運営しながら、絵を描いたり人形劇を行なっている。エイブルアートとの活動として、障がいのある人が社会に出る前に通う場所での出張人形劇ワークショップを実施中。



「障害」を感じさせない場所 ～パペットアートヴィレッジの取り組み

今年度のパペットアートヴィレッジも活動の集大成となるこぐま座での発表会が迫ってきました。ロボットダンス&ロボットづくりから始まった今年度は、どのような締めくくりを迎えたのでしょうか。本紙が配布される頃には発表会を終えていますので、こぐま座HPでは是非、その様子をお楽しみいただければ幸いです。



さて連載の最後となる今回は、私を感じる本事業の魅力を紹介させていただきます。

まず1つ目は、ソーシャルインクルージョンが体现された場であるという点です。参加している子ども達それぞれの「やりたい」が色々な形で尊重されます。みんなでやろうと提案したことに対して、「それはできない」と感じる子がいれば、違う形での参加を求めます。おそらく別の場(集団)であれば、自分勝手や我儘と捉えられたり、無気力や不機嫌だと判断されたりして、「一緒にできないなら仕方がない」で済まされ、何もさせ

てもらえずに終わってしまうようなことだつてあるかもしれません。

ソーシャルインクルージョンは社会的包摂と訳されます。社会的に全ての人を包み込み、誰も排除されることなく、全員が社会に参画する機会をもつことができるという意味です。本事業では、それが自然と行われています。

2つ目は、人とのつながりです。本事業は保護者の皆さんが申し込んで参加します。ものづくり活動に参加させたい、集団行動のきまりを教えたい、落ち着いて過ごせるようになってほしい、障がいのある子ども達と触れ合う経験をさせたい、伸び伸び過ごさせたい、親離れしてほしい…など、保護者の思いも様々です。

そんな全く接点のなかった保護者同士がつながり、悩みを共有したり、進路について情報交換をしたり、日常で遊んだりする時間も生まれたりしているようです。家庭や学校、地域を離れたところに、人とつながった別の居場所ができることも本事業の魅力です。

3つ目は、参加スタッフの厚みです。中島児童会館・こぐま座・やまびこ座の職員を中心に、劇団関係者、音楽制作会社社長、歌手、教員、保育士、大学生、高校生、児童養護施

設職員、興味をもった地元の方、本事業卒業生とその保護者等々、経歴も立場も様々なスタッフは参加する子ども達の「やりたい」をどこまでもかなえてくれます。それによって、子ども達の可能性がどんどん広がっていきます。

また、スタッフの多くは本事業以外の場でも様々なイベントを開催していて、新しい文化の扉を開いてくれます。そこに本事業の子ども達が参加し、新たなメンバーが加わり、別のイベントでも一緒になり…と、少し課題を抱えている子ども達でも、特別な説明抜きに伸び伸び過ごせる場が増えているようです。

学校現場では、インクルーシブ教育という言葉が耳にする機会が増えました。それは素晴らしいことですが、それだけ学校や社会はイクスルーシブ(排他的な・のけものにする・高級)なものになっていると感じることも、残念ながら少なくありません。

全ての人が自然と自分らしく過ごしながらもインクルーシブされている。やはりそれが本事業の最大の魅力と言えます。

田中 摩弓 (たなかまゆみ)



遠軽町生まれ紋別育ち。北海道教育大学釧路分校卒業。国語科教員として、登別、苫小牧、札幌での中学校勤務を経て、現在は医療的ケアが必要な児童生徒が多く通う市立札幌北翔支援学校に勤務。



本の案内人「本シェルジュ」
厳選本の紹介
岸さん編 ⑥

岸 春江 (きし はるえ)

フリーアナウンサー・絵本ナビゲーター・絵本専門士
自宅に約3000冊の絵本を所有
主宰の「ファンタジアパル」は2019年 北海道読書推進運動協議会 「優良読書グループ 奨励賞」受賞



「このよでいちばんはやいのは」

ロバート・フローマン 原作 / 天野 祐吉 翻案 / あべ 弘士 絵 福音館書店

生き物や乗り物、風や光など、「速さとは何か?」という問いを通じて、身近なところから子どもたちに興味を持ってもらえる一冊です。幼児向けの科学絵本として出版されましたが、私は毎年、卒業を控えた6年生に読んでいます。「速さ」というテーマは、未来への期待や新たな挑戦への希望と重なるからです。ページをめくるたびに笑顔や驚きが広がり、子どもたちは自分なりの「速さ」を考える楽しさを味わいます。先日は、担任の先生が一番大きな反応を見せたのが印象的でした。「君にとって一番速いのは何だろう?」と問いかければ、思いもよらない答えが返ってくるかもしれません。この絵本をきっかけに、ぜひ子どもたちと想像力の世界を堪能してください。



「いのちのたべもの」

中川ひろたか 文 / 加藤休ミ 絵 / おむすび舎

私たちの体が食べ物でできているという普遍的なテーマを、親しみやすく心温まる形で描いた食育絵本です。物語は、男の子がお母さんからもらったメモを頼りに「よせなべ」の材料をひとつずつ探し、カゴに入れていく場面から始まります。その様子から、ワクワクやドキドキが自然と伝わり、読者も一緒に買い物をしている気分になります。また、登場する食材のリアルな描写が五感を刺激し、「おいしそう!」という感覚を共有できるのも、この絵本の魅力です。親子で一緒に読めば、「今日の晩ごはんは何にしよう?」と会話弾むことでしょう。教育的なメッセージを押し付けるのではなく、日常の小さな物語を通じて、食べる喜びや命のつながりを自然に気づかせてくれる一冊です。



編集後記

今回ご寄稿いただいた工藤さんとの出会いは3年前。仙台メディアパークで行われた「障害のある人と芸術文化活動に関する大見本市」に参加し、たくさんの方がさまざまな活動に携わっていることを知りとても刺激をうけました。私たちの取り組みの新たな一歩を踏み出すヒントをもらった大切なつながりです! (柳本)

お問い合わせ
お申し込み

札幌市中島児童会館 tel 011-511-3397
札幌市こどもの劇場こぐま座 tel 011-512-6886
〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番1号
(地下鉄南北線「中島公園駅」3番出口より徒歩1分)

MA・SO・BOに関する最新情報、
MA・SO・BO通信のバックナンバーは
ホームページからご覧いただけます。

